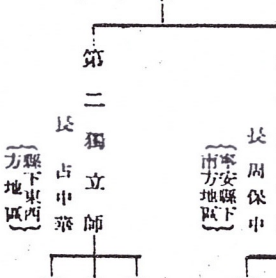
尙昭和十年十二月に於ける編成は寧安憲兵隊分駐所の發表によると、



第三節　第二軍の成立及びその移動狀況

人民革命軍第二軍が成立したのは昭和九年三月頃である。

それ以前の間島に於ける共匪の武裝活動は、滿洲事變前東滿特委領導下の農民團體の自衛組織として編成された游擊隊、自衛隊等によつて行はれてゐたが、此等武裝隊は滿洲事變後の混亂期に於ける破產農民の糾合、反亂脫走兵士の吸收等によつてその勢力を增大し、東滿特委軍事委員會の指導下に次第に軍隊としての實質を備へるに至つた。

昭和八年六月頃一月會報に基く東滿特委の新方針が確立したとき、從來の武裝隊を改編して人民革命軍を成立せしめることが決定された。そして從來パルチザン隊として各縣別に組織され、其の統制指導が不完全であつた武裝隊を一の統一的組織としての人民革命軍に編成することになつた。武裝隊改編方針の概要は次の如くである。

「一、東滿特委軍事委員會指導下の游擊隊、自衛隊は反日兵士團等を聯合して人民革命軍を編成すること。

二、延吉縣及和龍縣の游擊隊其他武裝團體を人民革命軍第一團に、汪清縣及琿春縣の游擊隊其他武裝團體を人民革命軍第二團に編成し、從來の小隊基本を中隊基本に變更すること。

三、人民革命軍に於いては、從來の游擊隊員中より選拔して游擊便衣隊を編成し、五、六名乃至七、八名宛一隊として統治區域內重要都市に派遣潛伏せしめ、銀行・會社・金融部其他日鮮滿富豪を襲擊し、又重要街路其他要處に潛伏して、日滿軍輸送の糧食、物品を奪ひ、壯丁團襲擊等を斷行すること。

四、中國人の兵士をして各地滿洲國軍警と聯絡を取らしめ其の叛亂を煽動し、一方滿洲國軍警を通じて日滿軍事行動の內狀を探査し、彈藥の補給を受けること。」（九、三、二七、間總領）

滿洲事變後、全滿に亙つて軍警の反亂逃走相次ぎ、間島に於いても昭和六年には約二百四十名、昭和七年には約二千二百四十名の多きに達し、就中昭和七年二月の王德林の反亂は同地方を震撼させた。彼等は昭和七年四月の日軍出兵によつて大打擊を受けたが、敗殘兵士等は夫々抗日救國の旗旆を掲げて吉林新政權に反抗し、一般民心も頓に動搖した。共匪は斯くの如き狀勢に乘じて宣傳煽動を行ひ、反亂兵士の糾合に努めた結果、益々勢力を增大して昭和九年三月には武裝隊約一千名を擁するに至つた。

試みに琿春游擊隊について見れば、

「昭和七年七月派遣された工作員の努力により救國軍第十三團々長祖旗中と提携し、游擊隊十四名を組織して長銃十四挺爆彈數個を得た。昭和七年九月頃には大荒溝方面より姜錫煥等十餘名の武裝隊が同游擊隊に加入した。其後救國軍が歸順するに至り七年十月頃には、救國軍第十三團連長孔憲伸は武裝した部下十五、六名を率ゐる大荒溝游擊隊に加入した。其外救

國軍中より申泰林・王振源・國洙東・馬俊範等も武裝の儘游擊隊に參加した。又昭和八年二月中旬頃、救國軍總司令吳義成の敗殘部隊が日本軍の討伐に會ひ、武裝匪六十餘名は綏傾に逃入し、殘留者三十餘名は分水嶺游擊隊を編成したが、同游擊隊は間もなく煙筒磊子游擊隊に加入した。この外滿人財產家の私有武器や馬賊の兵器を奪取して游擊隊を擴大させた結果、琿春游擊隊は二ヶ大隊百餘名、長銃九十挺、拳銃六挺、爆彈七、八十個を有するに至つた。」（朴斗南の供述（九、八、三〇、延剛））

斯くして昭和九年三月延吉縣三道崴能芝營山頂に、東滿特委軍事部責任王德泰、特委組織部責任李相默、反日游擊隊首腦部、抗日軍首領等約十五名集合して、從來特委の領導下にあつた游擊隊及び義勇軍系各匪を糾合して東北人民革命軍第二軍第一獨立師を編成した。同席上で選擧された主要幹部次の如し。

東北人民革命軍第二軍第一獨立師長（兼游擊隊總隊長）　朱　鎭（鮮人）
同　政治指導員　王　德　泰（滿人）
同　參謀處　別名　副官（鮮人）
同　經理處　金　某（鮮人）
同　第一團長　別名　風呂敷（鮮人）
同　第二團長　別名　木　匪（鮮人）
同　第三團長　孟　昭　祥（滿人）

尙同席上に於いて第一獨立師の根據は當分延吉縣三道崴東溝に置き、間琿一帶に亘る各匪の懷柔による赤色游擊運動を擴大激化せしむること、第二獨立師は後日相當兵力に達したとき組織することなどが決議された。

當時制定された人民革命軍關係綱領次の如し。

「一、日本帝國主義は陸海軍を派滿永駐せしめ、飛行機工場、鐵道、無電、諸工廠、兵營等施設をなし、滿洲三千萬民衆を屠殺すべく計畫しつゝあるを以つて全民衆は日本の政策に反對し、其の施設を破壞し、滿洲地帶より驅逐すべし。

二、滿軍を瓦解反亂せしめ人民革命軍旗下に糾合し、滿人賣國奴と日本顧問を殺害清算すべし。

三、滿洲稅制は民衆の汗血を搾り、日帝は民間の武器を沒收して、革命抵抗力を奪ひ、日語教育を强制し人民思想を麻痺せしめ、鐵道を敷設して革命同志の殺戮を便ならしめつゝあるを以つて、全民衆は納稅及一切法令に反對すべし。

四、日本人及滿人賣國奴の一切の財產を沒收して反日工作及革命軍費に充當すべし。

五、日本人及滿洲賣國奴等の武器彈藥を沒收し、革命軍及び一般民衆の武裝を完備すべし。

六、群衆鬪爭を發動せしめ游擊區域を擴大すべし。

七、農民委員會は鄉村實際政權機關にして將來唯一民衆政府への擴大の基礎なるを以つて、革命軍と農民委員會の關係を密接ならしむべし。

八、工、農、兵、學及革命軍官を以つて反日革命の統一戰線を構成し、敵の中央及裏面を破壞すべし。

九、リットン報告に反對しソ聯勞働群衆と友誼的聯盟の結成を鞏固にすべし。等」（九、六、閒總領）

次いで昭和九年五月三十日、五卅暴動記念日を期し、延吉縣大荒溝に於いて汪清縣下の反日游擊隊、反日會員、反滿匪の一部を參集せしめて第二獨立師を組織し、汪清・琿春兩縣下を行動區域とした。同日決定した重要幹部次の如し。

東北人民革命軍第二軍第二獨立師長　某（滿人）
同　政治委　李　某（鮮人）
同　第二獨立師第一團長　某（滿人）
同　政治委　南　昌　一（鮮人）
同　第二獨立師第二團長　陳　滿　山（滿人）
同　政治委　金　日　善（鮮人）

同　第二獨立師第三團長　侯　國　春（滿人）

こゝに於いて第一獨立師は延吉縣三道崴王隅溝を中心として延吉、和龍兩縣下を、第二獨立師は汪清縣大汪清を中心として汪清、琿春兩縣を夫々游擊區域と定めて陣容部署を整へた。

然るに昭和九年秋期討伐により間琿地方に於ける各組織は大打擊を受け、和龍縣委は二道溝赤色區域内の民衆竝に武裝隊と共に安圖縣車廠子東南廠に移動した。又昭和十年二月頃、延吉縣王隅溝、三道溝地方の赤色區域が破壞されて、同方面の人民革命軍は黨、團、赤色民衆と共に車廠子方面に移つた。斯くして昭和十年六月頃、當時汪清縣羅子溝にあつた東滿特委との連絡不便のため安圖縣東滿特委代表委員會が設置されるに至つて、人民革命軍第二軍第一獨立師は根據地を完全に安圖縣方面に移動した。

併し乍ら昭和十年日滿軍警の秋期討伐によつて、車廠子の根據地が覆滅されたため、安圖縣奶頭山方面に根據を構へたが、これも亦極度の物資難に陷つて昭和十一年二月頃撫松縣三道流河地方に移動した。

他方汪清縣羅子溝を中心として蟠踞してゐた第二獨立師は、昭和十年秋冬期討伐によつてその根據地を覆滅され、東滿特委と共に寧安縣南湖頭方面に移動した。

斯くして人民革命軍第二軍は間琿平野を中心として南北に二分され、北方部隊は寧安縣鏡泊湖附近を中心とし、汪清・寧安・東寧各縣境地方に蟠踞して附近を游擊し、南方部隊は安圖・敦化・額穆・樺甸・撫松方面の山嶽地帶に蟠踞游擊するに至つた。卽ち間琿地方より擊退された共匪は間島平野を圍む土門嶺・老松嶺・老爺嶺・哈爾巴嶺・英額嶺、及び之と連る新開嶺・牡丹嶺等各山嶽地帶に遁入した。（昭和十一年九月現在に於いては既に敦化、額穆の二縣には蟠踞共匪なく、南方部隊は專ら撫松を中心として撫松、安圖、樺甸の各縣を游動しつゝある。）

今第二軍管區月報統計により共匪の移動狀況を見れば第一表の如くである。

第一表　地域別共匪累月匪數表

昭和十年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
延吉縣	七二〇	四九〇	五四〇	一六〇	二五〇	二九〇	一一〇	一〇〇	二〇〇	八〇	二一〇	三〇
汪清縣	一八〇	二六〇	三二〇	一〇〇	一七〇	四一〇	五五〇	四八〇	四〇〇	二九〇	六〇	二〇
琿春縣	二〇	七〇	二〇	二三〇	一八〇	九〇	一三〇	四〇	—	三〇	一一〇	六〇
和龍縣	—	一五〇	二七〇	二二〇	二四〇	一三〇	一七五	一八〇	—	五〇	—	—
小計	九二〇	九七〇	一、一五〇	六一〇	八四〇	九二〇	九六〇	八〇〇	六〇〇	四五〇	三八〇	一一〇
額穆縣	—	—	—	—	—	—	—	—	一五〇	一五〇	八〇	八〇
敦化縣	—	二〇〇	一八〇	二二〇	四二〇	三〇〇	—	—	—	—	—	—
樺甸縣	—	—	—	二〇〇	一五〇	四八〇	二九〇	二〇〇	一〇〇	四〇〇	二〇〇	二〇〇
安圖縣	二六〇	三三〇	三〇〇	一五〇	—	二五〇	一三〇	一八〇	—	—	一五〇	三〇〇
小計	二六〇	五三〇	四八〇	四七〇	五七〇	一、〇三〇	四二〇	三八〇	二五〇	五五〇	四三〇	五八〇
合計	一、一八〇	一、五〇〇	一、六三〇	一、〇八〇	一、四一〇	一、九五〇	一、三八〇	一、一八〇	八五〇	一、〇〇〇	八一〇	六九〇

昭和十一年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月
延吉縣	三〇	—	—	一六〇	二〇〇	—	—
汪清縣	五〇	一三〇	一六〇	一〇〇	五〇	—	—
琿春縣	七〇	—	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇
和龍縣	—	—	—	—	—	—	—
小計	一五〇	一三〇	二二〇	三二〇	三一〇	六〇	六〇
額穆縣	八〇	二〇〇	二〇〇	—	二七〇	一七〇	七〇
敦化縣	—	—	二〇〇	二〇〇	三〇〇	四七〇	三七〇
樺甸縣	二〇〇	四八〇	二〇〇	三五〇	四五〇	六六〇	八六〇
安圖縣	三五〇	二二〇	五〇	一〇〇	一三〇	—	一五〇
小計	六三〇	七〇〇	六五〇	六五〇	一、一五〇	一、二六〇	一、四五〇
合計	七八〇	八三〇	八七〇	九七〇	一、四六〇	一、二六〇	一、五一〇

註　一、第三軍管區月報より作成。

二、第二軍の活動地域としては撫松、寧安、東寧の諸縣を缺く。

間島地方即ち延吉・汪清・琿春・和龍の諸縣に於いては昭和十年七月迄は匪數に多少の變動を示しつゝも、比較的固定した蟠踞狀態を示してゐたが、延吉縣では七月以降、琿春・汪清・和龍各縣は八月以降、四縣合計に於いては八月以降急激な減少を示し、昭和十一年に入ると共に汪清縣を除き殆んど固定匪賊がなくなつてゐる（これも六月以降は消滅）。然るに一方隣接山嶽地帶に於いては、敦化縣では昭和十年二月より、樺甸縣に於いては四月より、額穆縣に於いては九月より（安圖縣は昭和九年末）共匪の蟠踞を見、期節的變動を見せつゝ昭和十一年七月に於いては前年同期の三倍以上となつてゐる。これは永年間島に蟠踞してゐた共匪が、昭和十年初の赤色地域解放以後急速に地盤を失ひ、日滿軍警の討伐に堪え得ずして此等の諸縣に移動したことを物語る。

第四節　東北抗日聯合軍第二、五軍の成立

間島平野地帶の共匪壞滅後人民革命軍第二軍は南北に二分し、北方に移動した第二師は第五軍と合作し、南方に移動した第一師は南滿第一軍と連絡して游擊活動を繼續したが、斯くの如く部隊が分散し勢力薄弱となつた第二軍を強化し、流游擊區を恢復すると同時に、東滿に於ける統一的反日作戰を行ふべく、第五軍の強力な全面的援助と第一、第二、第三、第四軍との緊密なる連絡を計るに至つた。昭和十年末頃滿洲省委より第四、五軍の一九三六年軍事行動に關する新計畫試案が發せられたが、その東滿に關する部分を摘記すれば次の如くである。

「一、第五軍は現在の地域を基礎として寧安西部、額穆を中心として二隊に分ち、寧安に本部を置く。

イ、一隊（第二軍の參加あるを豫想し、兵に多數を要せず）は西部五常、葦河方面に進出し、第三軍の南部隊と聯絡共同し、葦河地方に葦河游擊隊を組織することを主要目的とす。

ロ、一隊（第五軍の主力）は安圖、樺甸、撫松等に進出し、第二軍の西部隊と合し、第一軍と連絡す。（第一軍との連絡は單に軍事上に止らず、政治上に於いても有意義にして且つ組織上大いに必要なり）又延吉地區の義勇軍（其の大部分は周系―太平、註）との連絡團結を計るを主要目的とし、安圖、撫松に人民革命政府を建立するを理想目標とす。東部隊（第五軍、註）は現在穆稜に於いて活動中なり。故に各隊（二軍の大部及五軍の一部）は寧安に歸還することなく直ちに穆稜に集結し、爾後東部隊は穆稜を中心として二隊に分ち、

ハ、一隊は（五軍適當ならん）は東南方東寧に出兵し、第二軍及東部隊と連絡の上新游擊區を設置し、孔（慈榮―註）吳（義成―註）を統一し、該地方反日會を中心として戰線の回復を計るを主要目的とす。（五軍指揮下に東寧にある歸順靖安軍を配す）

ニ、他の一隊（二軍主力）は北方密山、勃利、依蘭方面に進出第四軍と緊密に連絡し、第四軍の發展を計り、その軍事活動を援助し、又第三軍（依蘭、方正方面にある）と連絡するを主要目的とす。

ホ、寧安軍本部は相當の兵力を殘置し、出動部隊を聲援すると共に、海林、牡丹江、五河林等の新游擊區となし得る如何なる地方をも新游擊區となし、一方游擊區を死守するに於いては最後の勝利確實なり。

幹部の配置。

イ、西部安圖部隊の如く遠隔の地は當機關の指令意の如くならざるにより、過去の經歷等考慮して周同志の前進を要求す。第五軍設立當時を顧ればこの一年間に於ける軍情は面目一新せり、これ周保中同志の努力に依るところ大なり。周同志前進せば總ての工作は一層有利となるべし。

王健雄同志は周同志に同行し之を幇助す。

ロ、穆稜部隊は軍事上李荊樸を、政治上王興を責任者とす。

ハ、葦河部隊は金日成を責任者とす。

ニ、寧安留守部隊は軍事上柴世榮、傅顯明、政治上胡仁、陳翰章を責任者とす。

ホ、東部穆稜は二軍の王潤成同志を責任者とするを最良とせん。

ヘ、勃利部隊は二軍の候團長を責任者とし、政治上李光林を責任者とす。

ト、東寧部隊は軍事上李延元同志を政治上高同志を責任者とす、但し最初王潤成同志を以つてするも可なり。

以上二軍及五軍協同活動を爲すに當り、軍事上指揮統制上種々の困難を伴ふに依り、茲に二、五軍東線指揮部を設置し、東寧、穆稜、密山、勃利等に活動する二、五軍は部隊の如何を問はず東線指揮部の指揮を受け、額穆、葦河、敦化、安圖、樺甸等の地域に於いて活動する二、五軍は悉く西線指揮部の指揮を受け、而して東西兩指揮部は寧安軍本部の指揮を受け、周保中同志は總指揮兼西部指揮とし、李荊樸を副指揮、金日成（二軍）を政治部主任に任じ、東線指揮部は王潤成同志を總指揮に、候團長を副指揮に、李光林を政治部主任に任じ、寧安にて活動する二、五軍の部隊は軍本部直轄とす。

第二軍及第一軍の軍事行動の方向

1、第二軍の精銳なる部隊は東滿に於いて活動すること既に三、四年にして光輝ある歷史を有し、日寇に對し不斷に打擊を與へ日寇の討伐目標となれり。茲二、三年來日寇は大部隊をして逐年逐月討伐を續行し、保甲制の確立、集團部落の結成をなし、鐵道、自動車道路、電信電話等の新設を行ひ、一方我等に對し經濟封鎖をなす等我游擊區內に於いて相當成果を收めつゝあり。爲に我軍は糧食其他に於いて少なからざる困難を感じつゝあり。

第二軍の將來に對する發展上及我軍の活動並革命工作の遂行上、其の永久性に對し最小範圍の縮少を餘儀なくせられたり。故に第二軍は少數を東滿留守部隊とし殘置せしめ、爾後は外部に移動せざるべからず。其の移動方向は、

イ、一部を和龍、延吉方面に、

ロ、一部を西南方敦化、額穆に至らしめ、額穆にある五軍と合して五常、葦河に移動して勢力の伸張を計り、

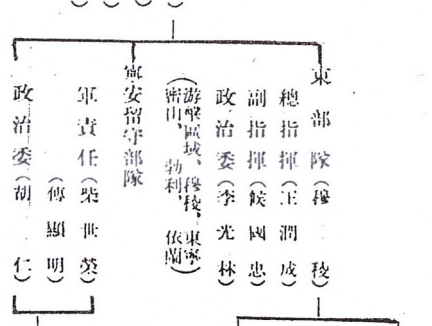
八、一部を第五軍の安圖遠征隊に加はらしめ、西部に推進して、第一軍と連絡せしむ（第五軍は現在の關係上北滿に移動し、漸次勃利、密山方面に移動せしめ、勢力の伸張を計らしむ、然らば游擊區擴大し第三軍の東滿に於ける活動を容易ならしむるなり）

2、第一軍現在の活動狀況如何、我等は後輩なるにより其の材料僅少なるも、我等の第一軍々事行動に對する意見は卽ち次の三方面に分つを至當と思考す。

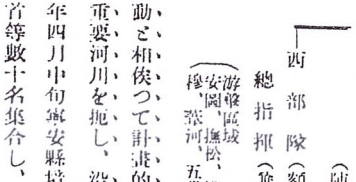
（イ）一部は通化、柳河一帶より東進し、撫松、樺甸、安圖に出で、第二、五軍と連絡し相互に工作の輔助をなす。

（ロ）一部は兵力を二分し吉海鐵路方面及吉長鐵路一帶に活躍せしめ第三軍と連絡せしむ。」（二一、四、二〇關東軍司令部）

以上の組織形態を表示すれば次の如くなる。



（陳翰章）



斯くして第一、三、四軍の活動と相俟つて計畫的に京圖線、圖佳線、濱綏線、拉濱線、林密線、奉吉線等、東部滿洲の重要鐵道及び松花江、牡丹江等の重要河川を扼し、沿線平野地帶の進攻と赤化を遂行すべき陣形を整へんとしたのである。

この方針に基いて、昭和十一年四月中旬寧安縣境鏡泊湖西南方大溝に於いて、第二軍長王德泰、第五軍長周保中、其他第二、五軍首腦部及び東北義勇軍系隊首領數十名集合し、中共東滿黨團の勢力再興を計るべく過去の錯誤を檢討し、第二、第五軍合作の方針を立て、兩軍混成部隊の編成を決定した。

一、同會議の參加者

第二軍長	王德泰	
第五軍長	周保中	
同副軍長	柴世榮	
第五軍政治委	李光林	
第二軍第二師第一團長	方振聲	
同　政治委	林遠山	
第二軍第一團長	金明八	

東北義勇軍總司令　吳義成
外幹部數十名

二、討議事項

1、過去の工作に對する批判

中共黨滿洲省委の任務は日本帝國主義を滿洲より驅逐するにある。然るに東滿黨はその戰術、階級的に偏したる結果一般反日分子をも分離したのみならず、却つて革命軍に武裝反抗せしめた。

例へば、武裝組織に於いて公然反日聯合に依らざる純粹に無產階級を代表したる農民游擊隊又は人民革命軍を造り、宣傳工作に於いても眞の反日群衆を反日隊内に參加援助せしめ得ず、富農、年金者等の反日分子にも主義宣傳を爲さゞるのみか、革命軍の敵なりとして虐殺沒收等の行爲を爲した。以上は東滿黨の敗因にして、之等工作錯誤に關しては一九三四年に於いて數次討議をなし、同十一月二十八日人民革命軍を抗日救國軍と改稱したるも、現在黨の路線執行は徒らに機械的となり、過去の反日實踐は無計畫散瞞的であつたことを確認する。

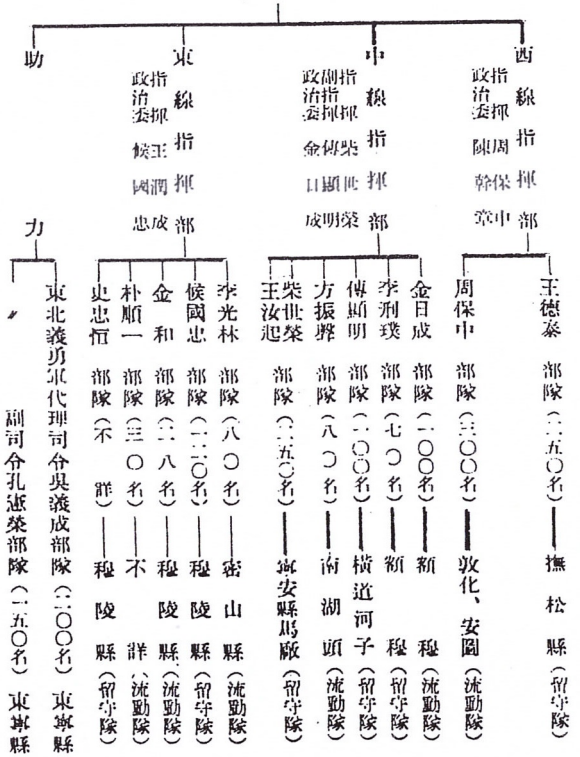
2、反日戰線の强化

各山林隊を東北抗日聯合軍に加入せしめ、而して農民を虐殺、殺害する等中共黨工作に障害を及ぼす虞ある各種團體は武裝解除を斷行すべし。而して反日性を有する地主、資產階級は速に反日戰線に參加せしめ、抗日軍の支援分子となすべし。

3、第二、五軍の混成部隊の編成

東滿黨團の敗因は以上の如くであるから將來第二軍第五軍の團結的領導組織を編成して組織を强化し、緊密なる連絡を保ちて組織的軍事行動を敢行すべし。組織左の如し。

第二、五軍　混成部隊組織表



反日關係能力の向上を計る爲め活動區域を左の如く定む。

イ、東線區域——穆陵、東寧、密山、勃利。

ロ、中線區域——五常、蛟河、額穆、寧安。

ハ、西線地域——敦化、安圖、撫松、樺甸。

右の地域別により留守隊と流動隊を配置し、留守隊は各々擔任區域を保持し、流動隊は各地に流動して猛烈なる闘爭を敢行すべし。中線の流動部隊は東西兩線と緊密なる連絡を保持すると共に第三軍南部々隊と連絡すべし。西線流動部隊は南滿の第一軍と連絡し、東線流動部隊は第三軍と連絡を執りつゝ組織的軍事行動を以つて各留守部隊の反日戰線を援助すべし。

4、第二軍（東滿地域）回收の件

以上の如き組織と計畫を以つて反日戰線を強化擴大し、奪取せられたる第二軍地域の回收に努むること。

5、其　他

右領導組織は軍制組織の改編に非ず、只工作上便宜を計らんが爲にするものにして、革命思想薄き部隊と戰闘力なき小部隊を指導して反日戰線に參加せしむる必要あるにより斯くの如く組織せり。

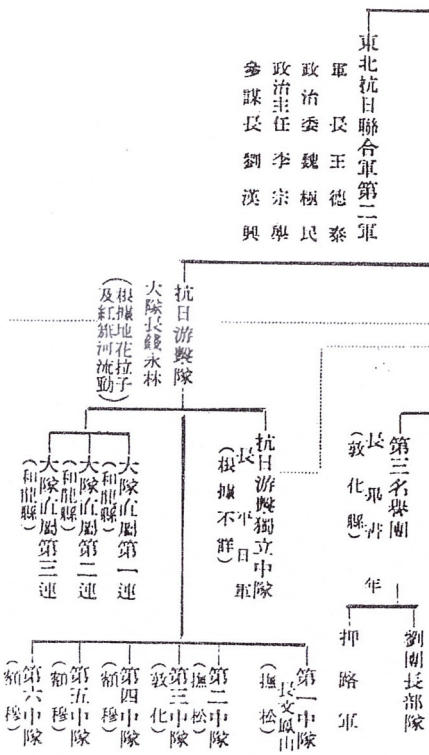
尚實際工作につきては八月反帝記念日を利用し、小都市進行竝に集團部落襲擊等各種行動を以つて廣範圍なる群衆の反日熱を鼓吹すべく努むべし。」（一一、八、一二、敦發安）

この第二、五軍合作方針は其後に於ける軍隊の討伐、地方民衆の狀況等による歪曲は免れないが、上記目標に向つて邁進し、着々實現しつゝある。

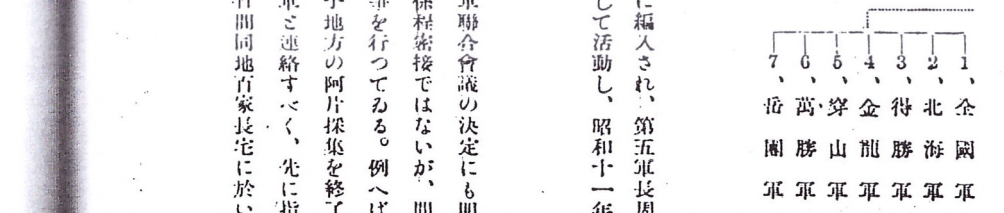
「東北抗日聯合軍第五軍副軍長柴世榮は四月中旬同軍第三師長吏忠恒、同師政治委王潤成等を率ゐ、寧山縣に移動隷下部隊を領導して工作に專念してゐたが、其後柴世榮は南湖頭に於いて開かれた東北抗日聯合軍第二軍同第五軍聯合幹部會議に列席し、同席上に於いて可決されたる第二第五軍混成部隊の地域分配により中線指揮長を被命されたるにより、六月下旬再び歸寧、留守隊として同軍第一師兵力二五〇名を統率し、日下寧安縣八道溝及三道河子奥地密林中に根據を置き、同馬廠、北臉溝に於いて活動し、同師第三團王汝起は部下約五〇餘名を率ゐ鏡泊湖北湖頭に根據し、拌載溝、東京城、江北方面に進出して物資補給中なり。」（三、八、一五吉鐵警）

又昭和十一年九月現在寧安を中心とする一帶の共匪は殆ど第二、五軍の名を以つて活動してゐる。（宣傳煽動ビラ物資要求狀等）

第二軍第一師組織表



1、全國軍
2、北海軍
3、得勝軍
4、金龍軍
5、穿山軍
6、萬勝軍
7、岳團軍



註　――――は直系領導系統を示す。
……横的連絡關係を示す。

前記の如く第二軍は第二、五軍總指揮部に編入され、第五軍長周保中によつて統制されるに至つたが、周保中部隊は未だ南下せず、西線地域は抗日聯合軍第二軍として活動し、昭和十一年八、九月頃に於ける同地域活動部隊の組織及根據地は右表の如くである。

次に南滿第一軍との關係は如何。

前記一九三六年軍事行動計畫及第二、五軍聯合會議の決定にも明かな如く、第二軍は第一軍と緊密に横的連絡をとらんとしてゐる。その關係は第五軍と第二軍の關係程密接ではないが、間島方面の共匪の壞滅、第二軍第一師の南遷によつて行動地域が接近或は重複した結果、屢々共同闘爭を行つてゐる。例へば、

一、「康德二年九月上旬、撫松縣五母頂子地方の阿片採集を終了せる東北人民革命軍長以下二百名（第二團第二、三連）は通化縣地方に根據中の東北人民革命軍第一軍と連絡すべく、先に指定せる樺甸、濛江、撫松縣境河拉江滿人部落に赴き、第一軍長楊靖宇部隊と合流し、同日より約二日間同地百家長宅に於いて、連長、政治委、參謀長の聯合秘密會議を開催した。會議の内容を仄聞するに協議事項は、

1、東北人民革命軍第一、第二軍協同戰線統一の件。
2、人民革命軍糧食問題の件。
3、積極的に日滿軍を襲擊し、三八式彈藥を使用し得る銃器を奪取する件。
4、中國共產黨部特使派遣の件。

等であつて、議論百出し頗る盛會裡に終了した。その結果、軍の士氣を鼓舞するため成績優秀なる連に機關銃及び表彰旗を與へる事、又將來銃器彈藥の補給はソ聯より購入すること不可能なる狀態にあるを以つて、三八式銃器及び彈藥を補充すること、各團總處長の統轄下にある兵器廠内に兵器科を新設統一すること、食料問題に關しては將來集團部落の增設に伴ひ警備嚴重となり、且つ散在部落減少のため食料入手困難を豫想せらるるを以つて、各連は政治委の指導下に積極的に鮮滿人富豪要人を拉致し、其の人質料により食料を購入すること、各團總處長の下に糧食科を新設すること、等の決議をなした。かくて日滿軍警の討伐終了まで同地に潛伏し、兩軍共各根據地に引上げた。」第二軍第一師元糧食科長王樑利供述（一一、五、二八延地委）

二、「東滿特委は南滿特委と相提携し、東北人民革命軍第一軍及第二軍隷下各武裝隊を總動員せしめ、共同作戰計畫の下に本年五月メーデー「テロ」工作を決行すべく協議し、更に之が實行に對する細部協議打合せのため、四月三日頃革命軍首腦部第一軍代表楊靖宇、第二軍代表王德泰、隷下各團代表及政治委責任數名並に主要黨團員（特委責任及中心縣委責任等）計十二名は安、敦、樺三縣境界富爾嶺蒲柴河北方八軒部落に於いて秘密聯席會議を開催したる由である。決議事項左の如し。

1、東北人民革命軍第一軍、第二軍隷下武裝隊は全力量を以つて一九三六年メーデー紀念工作を決行し、一〇〇％の成果を收めること。

2、武裝隊の暴動工作順序

イ、日滿軍警、自警村、自衛團、保甲事務所等の襲擊。

ロ、走狗、反動分子の擊滅竝に財產沒收。

ハ、鐵道破壞、列車襲擊、鐵道從業員の撤回、愛護村の燒打。

ニ、山林隊其他雜色武裝隊を武裝解除し、革命軍に編入すること。

ホ、日滿軍警中警備薄弱なる部署より順次襲擊掠奪し、銃器彈藥の補充を計ること。

ヘ、夏服地及糧秣其他部隊の必需品を掠奪すること。

ト、歸順意志を有する雜色武裝隊伍を完全に討伐淸算すること。

3、武裝せざる各級黨部の黨員は、上級黨部の指令を受けて行動し、「テロ工作」の成果を充分收むること。

イ、非武裝黨團員は必死的努力を以て人民革命軍を援助し、諜報の蒐集、敵情偵察の如き重要任務に從事せしむること。

ロ、非武裝黨團員はメーデー前後の工作期間に於いて新に一千名の同志を吸收せしむべし。」（一一、四、一七、第二軍區）

三、「第二軍第一師長安鳳學は同第二連長金明八部隊三〇名、團部の武裝匪六〇名を率ゐ、樺甸縣要北端漂河に蟠踞し、第一軍第二師長曹國安部隊の一部と第五軍平南洋匪を結合し、第一軍及び第五軍との連絡を緊密にしつつあり。」（一一、七、三〇第二軍區）

「昭和十一年六月二十五日第一軍第二師長曹司令及第二軍第一師第二連長金明八の部隊は合流して額穆縣杉松嶺集團部落を襲擊した。」（一一、七、一、樺甸縣警）

尙第二軍の武器彈藥の補給に於いて、一部第一軍より支給してゐるとの報もあるが、眞僞不詳である。

第一軍第二軍の關係は討伐による南滿共匪の北上と共に益々緊密さを加へるであらう。

第三章　人民革命軍第二軍の內容

第一節　裝備、武器彈藥の補給

一、裝　備

人民革命軍の裝備は時期、部隊、日滿軍の討伐狀況、一般民衆との關係等の如何によつて異るが、今情報によつて裝備狀況を見やう。

第一表は作成に不審の點もあるが、これに依つて次のことは明かである。

一、共匪、兵匪、土匪とも裝備が漸次充實して來たこと。（昭和十年十月の共匪及び兵匪の裝備低下は、當時間島地方の共匪が壞滅過程にあり、他地方への移動、又は自體の崩解等の變動の爲であらう。）

二、裝備は以前共匪に於いて最も高く土匪に於いて最も低かつたが、漸次水準が接近しつつあること。これは打續く日滿軍警の討伐によつて裝備の惡い匪賊は淘汰され優秀なもののみが殘つた爲であらう。

昭和十年末に於いて約一人に一挺の長銃又は拳銃、三人に一個の爆彈、一八〇人に一挺の輕機を所持してゐる。（第二表）

尙武器の種類及彈藥については、

「第一師長（當時軍長兼任）王德泰部隊（直轄獨立連約五〇名、第一團約百二、三十名）は直轄獨立連に輕機關銃一挺の外、團長連長はモーゼル拳銃を所持し、其他一律長銃（套筒銃、連珠銃、露式銃、三八式小銃の各種）を携行し居れるが、實包は射擊優秀なるもの（獵師上りの如き）平均二〇〇發、其他普通射手には一〇〇發、一般兵士には三〇發を携行せしむるを常とし、團長は望遠鏡を所持し居れり。」（一一、二、一三間總領）